

山北町立川村小学校

研究テーマ：人権を尊重し、互いに認め合い励まし合って、ともに伸びていく子どもの育成
～子どもとともに創る授業～

1 実践の目的

本校では、長年にわたり「人権を尊重し、互いに認め合い励まし合って、ともに伸びていく子どもの育成」を研究テーマとして校内研究に取り組んできた。一方で、子ども主体の授業をめざしながらも、授業や単元構成が教師主導になりがちであるという課題が見られた。

そこで今年度は、「子どもとともに創る授業」を研究の方向性として掲げ、子どもの願いや思いを起点に、教師と子どもが相互に主体となって学びを創っていく授業の実現をめざした。また、研究授業後の協議や研究だよりの作成を通して、子どもの姿を軸に授業を振り返る視点を学校全体で共有し、組織的な授業改善につなげていくことを目的とした。

2 実践の内容

(1) 校内研究会の様子

校内研究会では、「子どもとともに創る授業」を研究テーマとして、全職員で授業改善に取り組んだ。4月の研究会では、研究の方向性や視点を確認し、子どもの願いや思いを起点に授業を捉えることの大切さを共有した。

また、その一環として、人権問題に関わる学習である「直接教材」の研修を行った。これまで、直接教材の研究は主に5・6年生担任が中心となっており、他学年や級外の職員が資料や単元計画を十分に理解できていないという課題があった。そこで、夏季休業

中に全職員で資料や単元計画を確認・検討する研修を行い、これまでに積み重ねてきた教材や実践の意義を共有した。

さらに、直接教材の実践については、校内研修会の場だけで扱うのではなく、6学年それぞれの学級において自主公開授業として実施し、希望する職員が参観できる形をとった。これにより、実際の授業場面を通して、資料の扱い方や子どもの反応を具体的に共有することができた。

(2) 研究授業、研究協議の様子

研究授業では、各学年において「子どもとともに創る授業」をふまえた授業実践に取り組んだ。授業にあたっては、教師が単元全体の見通しをもった上で、子どもの発言や疑問を生かしながら学習を進め、「どうしたい？」という問いを通して、子どもが主体的に学びに関わる姿を引き出すことを大切にした。

研究協議では、教師の指導方法について協議するのではなく、授業中の子どもの発言や行動をもとに、「授業が動いた場面」や「学びが深まった瞬間」に着目して話し合いを行った。特に、子どもの疑問やこだわりが学級全体の学びへと広がった場面を取り上げ、教師の関わり方や環境設定について共通理解を深めた。

また、研究授業後には、各学年で研究だよりを作成・発行し、授業のねらいや子どもの姿、協議での気づきを整理して校内で共有した。

3 実践の成果と課題

(1) 授業実践・研究協議から

研究授業や研究協議を通して、子どもが自分の考えや疑問をもとに学習に関わろうとする姿が多く見られるようになった。子どもの気づきや発言を起点に学びが広がり、学級全体で考えを深めていく場面が増えたことは、大きな成果である。

また、今年度から「単元計画」ではなく、子どもの思考の流れをもとにした「単元構想」に取り組んだことで、学習の進行を固定するのではなく、子どもの問いや気づきを生かしながら授業を進める意識が高まった。教師が単元全体の見通しをもった上で、子どもの思考に沿って学びを構想することで、「子どもとともに創る授業」が具体的な授業の姿として表れ始めている。

一方で、子どもの主体性を大切にすあまり、問いの焦点が定まりにくくなったり、学習のねらいが十分に共有されなかったりする場面も見られた。今後は、教師の意図と子どもの思いをどのように重ねていくかを、授業と協議を通して引き続き検討していく必要がある。

(2) 学びづくりアンケートから

9月と12月に実施した児童アンケートから、低学年の生活科では「学習は楽しい」と回答した児童が95%以上を占め、学習に対する肯定的な意識が継続して高いことが分かった。体験や対話を通じた学習を楽しんでいる児童が多く、子どもの思いや願いを起点にした学習が、主体的に学びに向かう姿につながっていることが分かった。中・高学年の社会科においても、「学習は楽しい」と回答した児童が80%以上を占め、理由として「調べて分かる」「資料を見て考える」「自分の考えを発表できる」ことが挙げられていた。

一方で、「歴史の言葉が難しい」「調べても

よく分からない」「一つのことからいくつも考えるのが難しい」といった声も見られた。社会科では、制度や歴史、社会のしくみなど、直接見ることができない対象を扱うため、資料や言葉を通して理解する学習が中心となり、学びを自分事として捉えにくい児童が一定数いることが明らかになった。

今後は、低学年で培ってきた「どうしたいか」「なぜだろう」という問いを中・高学年の社会科においても意識的に位置付け、学習内容と子どもの生活や社会とのつながりをより明確にしていくことが課題である。

4 今後の展開

本研究を通して、子どもの思いや願いを起点に学習を構想することで、子どもが学びを自分事として捉え、主体的に関わろうとする姿が見られるようになった。今後は、この成果を日常の授業づくりに定着させていきたい。

また、研究授業や研究協議を通して子どもの姿をもとに授業を振り返る取組を継続し、組織的な授業改善につなげていきたい。